

論文内容の要旨

氏名	井上 正義
Efficacy of a combination of transarterial chemoembolization and radiation therapy for patients with hepatocellular carcinoma ineligible for resection or radiofrequency ablation (和訳) 切除およびラジオ波凝固療法が適応外と判断された肝細胞癌症例に対する経動脈的化学塞栓療法と放射線療法の併用療法の効果	

論文内容の要旨

【背景】

切除不能およびラジオ波凝固療法が適応外と判断された孤発性肝細胞癌に対して、経動脈化学塞栓療法が施行されることが多いが、その局所制御効果は、未だ満足できるものではない。一方で、肝細胞癌に対する放射線治療は、照射技術の革新により、良好な局所制御が報告されている。そこで、今回、経動脈化学塞栓療法を施行後に放射線治療を併用し、この併用療法の効果と安全性を評価することとした。

【対象と方法】

2017年1月から2020年4月までの期間で、外科的切除およびラジオ波凝固療法が適応外と判断された5cm以下の孤発性肝細胞癌を有する33例を対象とした。全例、経動脈的化学塞栓療法を施行後に放射線治療が施行された。初発症例が8例、再発症例が25例であった。経動脈的化学塞栓療法は、大腿動脈を穿刺し、カテーテルを腫瘍の栄養動脈に挿入し、選択的にエピルビシンおよびリピオドールの懸濁液を注入後に、スポンゼル細片を用いて塞栓した。放射線治療は、リニアックを用いた外照射で施行され、X線のエネルギーは、10MVを用いて施行された。照射方法は、初期の2例のみ回転原体照射で、それ以外の31例は回転型強度変調放射線治療で照射した。全例で、金マーカーまたはリピオドールの集積を用いて、Cone-beam CTおよび透視画像で位置照合を行った。処方線量は、40-60Gy/5-20Frであった。

【結果】

観察期間中央値は、16 months (range; 6-47 months)であった。奏効率(CR+PR)は、66.7%(22/33)、1.2年全生存率は、それぞれ72.7%、62.5%であった。腫瘍径5cm以下の腫瘍に限ると、その奏効率(CR+PR)は、79.2%、1.2年全生存率は、それぞれ91.7%、62.5%であった。無増悪生存期間の中央値は、13.5 months (range, 3-47 months)であった。1.2年局所無増悪生存は、それぞれ95.8%、85.7%であった。照射3か月後に、Grade2の放射線食道炎および腹水貯留が、それぞれ1例ずつ認められた。

【結論】

切除不能およびラジオ波凝固療法が適応外の肝細胞癌に対する放射線治療と経動脈化学塞栓療法は、良好な局所効果が期待できる治療方法であると思われ、特に長径5cm以下の肝細胞癌に対して、有用な治療選択肢になり得ると考えられた。